まんよう うたげ 万葉の宴

加羅古呂庵 一泉

万葉の宴

『万葉集』の数多くの歌の中から宴にまつわる歌を題材に、「月の舟出づ」「一坏の濁れる酒を」「この世にある間は」の3つシーン(場面)で構成してみました。

春日なる 御蓋の山に 月の舟出づ

みやびをの飲む酒坏に影に見えつつ

作者未詳(巻7の1295)

験なき 物を思はずは 一杯の

濁れる酒を 飲むべくあるらし

大伴旅人(巻3の338)

生ける者 遂にも死ぬる ものにあれば

この世にある簡は 楽しくをあらな

大伴旅人(巻3の349)

平城京の東、御蓋山とその向こうの春日山。その上に出た半月を舟に見立てて、 盃の酒に浮かべよう。雅な宴の始まり。

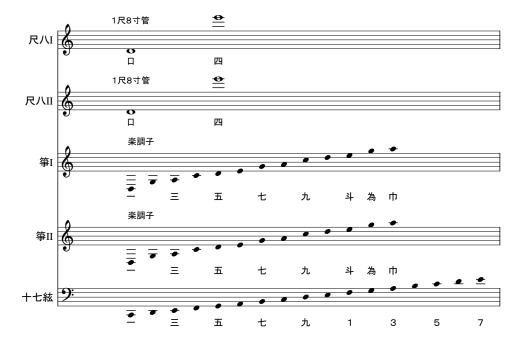
悩んでもしかたがないことをあれこれ思い悩むよりは、一杯の酒を飲んで忘れてしまおう。孤独な宴。

生きとし生けるもの、必ず死が訪れる。生きている間は楽しくありたいもの。 宴も佳境、人生も。

参考文献:『万葉手帳』(上野 誠、東京書籍)

※縦譜につきましては、当該楽器のほかに他の楽器のパートを補助的に記載しています。ただし、複数のパートを集約し、オクターブも変えているところがあります。また、十七絃は箏に置き換えて記載しています。正確には、五線譜(スコア)をご参照ください。

加羅古呂庵ホームページ



運指、奏法については、適宜工夫していただいてけっこうです。



































10







11











15







